

講 義 内 容

植物細胞分子科学特論

Advanced Plant Cell and Molecular Science 2単位

1983年に、植物に初めて外来遺伝子を導入することに成功して以来、数多くの植物に対して、さまざまな外来遺伝子が導入されてきた。本講義では、油糧作物であるナタネを材料として取り上げ、1) ナタネのミトコンドリアゲノム、2) 雄性不稔遺伝子、3) 稔性回復遺伝子のクローニング、4) 植物における遺伝子導入方法、5) 遺伝子導入による遺伝子機能の解析方法、6) 遺伝子組換え作物の現状などを中心とした講義を行う。少人数の講義のメリットを活かし、講義を受ける学生個々の興味にそえる授業を行い、この講義を受けることで、植物のバイオテクノロジー、特に遺伝子工学をさらに理解できるようになる。

植物育種学特論

Plant Breeding Science 2単位

植物育種が対象とする形質は、生産力、ストレス耐性、耐病性、品質など多方面にわたっている。これらの形質を発現させる機構の解明は植物生理学・植物生化学の発展に伴って進められてきた。さらに近年は、分子生物学・遺伝子工学の手法を取り入れた育種の研究が飛躍的に進み、それらの成果に基づく応用研究も進められている。植物育種学特論では、植物の重要形質についての分子機構および遺伝子組換え植物開発の現状を、研究論文や総説から学ぶとともに、分子育種の可能性について考察する。

植物病理学特論

Advanced Plant Pathology 2単位

植物の病気はウイルス、細菌、菌類などの病原体によって引き起こされ、農業生産や生態環境を著しく損なうことによって、人類の生存と地球の環境を脅かす。病原体と植物とは、病原体側が各種の攻撃手段を、植物側がそれらの防御手段を、それぞれ競争的に進化させてきたが、最近の分子生物学や遺伝子工学の進歩は、このような植物-病原体間の相互作用を、分子レベル、遺伝子レベルでとらえることを可能にした。

そこで、本講義では、主として各種の植物病原体の病原性遺伝子ならびに宿主植物の抵抗性遺伝子について、それらの構造と機能ならびに発現制御機構に関する分子植物病理学的研究の現状を概説するとともに、最新の関係文献を渉猟することによって、植物の病気の感染・発病の分子機構について理解を深めるとともに、バイオテクノロジーを応用した病害抵抗性トランスジェニック植物の開発に関する最近の研究動向等についても知識を深め、病害防除のための新たな分子戦略の可能性を探る。

植物遺伝学特論

Advanced Plant Genetics 2単位

地球上に現存する生物種は、それぞれの種が出現して以来、遺伝子型に基づく生理作用と複雑な環境との相互作用によって数多くの生態型を分化し、地理的に多様な変異を示している。農作物においても、人為的な伝搬、栽培化により遺伝変異の多様性が見られる。これらの遺伝的変異は人類にとって貴重な遺伝資源であるが、近年の地球規模の自生地環境の変化、品種劣化などにより激減しつつある。本講義では、遺伝子型と環境変異、

適応のメカニズム、生態型分化、遺伝変異成立の原理と、消失の現状を踏まえ、生物種の多様性、環境適応、栽培植物の起源と種、品種分化、遺伝資源の保全について詳述する。

園芸学特論

Advanced Horticulture

2単位

園芸学には、野菜、果実、観賞植物などの園芸作物生産活動を行う園芸生産と、園芸作物の利用を通して生活に潤いをもたらす園芸文化などが含まれる。園芸作物は非常に多種類であり、生産方法、利用方法が多様であることから、植物の分類、進化、遺伝資源の探索から、栽培、育種などの自然科学的諸分野の他に、教育学、心理学等の社会化学的分野を含めた幅広い知識と技術の習得が必要になる。本講義では、これらの園芸作物を題材にした幅広い話題を提供し、園芸作物の生産、流通、利用、あるいは教育、研究、行政に関わることのできる人材育成を目標とした講義を展開する。

応用植物科学演習 I

Seminar in Applied Plant Science M-I

2単位

応用植物科学演習 II

Seminar in Applied Plant Science M-II

2単位

応用植物科学特別研究 I

Individual Research on Applied Plant Science M-I

5単位

応用植物科学特別研究 II

Individual Research on Applied Plant Science M-II

5単位

生体防御特論

Advanced Biological Defense

2単位

生物は個体を保持するために、外界からの攻撃に対し様々な生体防御機構を保持し、それを発揮している。この防御機構は原核生物、植物、動物と広く存在しているが、本講義では特に哺乳動物の生体防御機構である免疫系について講義する。

具体的には下記の内容で議論していくが、現在も新しい知見が報告されている分野でもあるので、時流の問題点にも触れながら展開したい。

1. 免疫と免疫系を構成するもの
2. 自然免疫および適応免疫の原理
3. 抗体の多様性発現の遺伝子機構
4. T細胞による抗原認識
5. 細菌を排除しながら共生も行っている腸管免疫系

植物生理・生化学特論

Advanced Plant Physiology and Biochemistry

2単位

植物は光をシグナルとして捉えて形態形成をおこし、あるいは光をエネルギーとして利用して炭水化物を合成して成長する。これらの光反応には、フィトクロム系、クリプトクロム系、フォトトリピン系を介した光受容とシグナル伝達、植物ホルモンの合成や葉緑体における光合成が関わっている。本講義では、これらの光反応のメカニズムを生化学的および分子生理学的に理解することを目標とする。同時に、光反応を生じさせる生理的意義を考察し、「光環境と植物」というテーマを考えるにあたり、体系的に事象を理解する能力を養うことを目指す。はじめに、光受容体の微細構造、光シグナル伝達、光受容体が引き金となる植物の二次反応、植物ホルモンを介した光形態形成について講義を行う。つぎに、光環境変化に対する光合成の応答と光阻害について分子メカニズムを理解し、植物の順化能力について考える。

応用生物有機化学特論

Applied Bioorganic Chemistry

2単位

安全性の高い医薬や農薬を作り出すためには、まず多くの天然資源の中からのスクリーニングや化学合成によって、新規の医薬・農薬の手がかりとなるリード化合物を見いだすことが重要である。これらの化合物は分子変換および分子修飾されて、新しい“くすり”へと発展する。そのためにはこれらの化合物の分子構造とそれに基づく生物活性との関係を究明して、合理的かつ独創的思考法による分子設計を行うことが必要である。この結果得られる受容体構造に基づくドラッグデザインの手法を体系化し、新薬を創製するための基礎事項について化学構造を中心に講義を展開する。この講義によって、生きた化学構造を実感してもらいたい。

細胞情報伝達論

Cellular Signal Transduction

2単位

多細胞生物は様々な外界からの刺激、環境条件の変化に対応し、その内部環境の恒常性を維持している。その個体の生命機能を保持するためには、組織あるいは細胞間の情報伝達機構が必須不可欠である。細胞情報伝達機構を大別すると、細胞外から細胞膜に作用する情報伝達物質、細胞膜での受容と応答、細胞内への情報の交換と増幅、細胞内情報伝達および情報伝達応答としての作用発現に分類される。これらのメカニズムがいかに精妙に構築されているかを、詳述する。

1. 多細胞生物でのシグナル伝達の意義
2. Gタンパク質共役受容体経路
3. MAPキナーゼ
4. サイトカインレセプター
5. 負の制御

応用バイオインフォマティクス

Applied Bioinformatics

2単位

近年、膨大な遺伝情報の解読が進められた結果、遺伝情報をベースとした生物の機能解析、比較生物学、生物物理モデリングなどが可能になりつつある。本講義では、最新のインフォマティクス技術を用いた生物学の新しい研究手法およびその活用について解説するとともに、日々の研究活動に活用できる身近なテーマでの計算機を用いた演習も実施する。具体的には、遺伝子配列解析、発現解析、ネットワーク解析からプロモーター設計などのバイオインフォマティクスでの重要な技術を理解し、ノウハウを習得する。さらに、生命科学の新たなチャレンジ分野であるシステムバイオロジー（生命をシステムとして理解する試みで、生物物理を基本としている）において、各自の研究テーマに即したモデル構築を試みる。

植物環境制御学特論

Regulation Systems for Plant Cultivation

2単位

世界の食料問題解決のための1つの手段として植物工場が注目されている。人工光を用いた栽培装置を用いて植物の生育をコントロールし、効率的な作物生産や生産物の品質、機能性向上を目的とした生産システムである。本講義では、植物工場など最新の植物生産システムを紹介し、その技術的基盤について解説したい。特に、植物の光反応と光要求性、その他の生育環境要因（温湿度、水耕条件、ガス環境、風など）が植物の生育や品質に与える影響とその制御方法について、植物工場などでの具体例を紹介しながら解説する。また、遺伝子組換え技術と植物工場技術を組み合わせた新しい製薬、機能性物質生産についても詳述する。

生理学・生化学演習 I

Seminar in Physiology and Biochemistry M-I 2単位

生理学・生化学演習 II

Seminar in Physiology and Biochemistry M-II 2単位

生理学・生化学特別研究 I

Individual Research on Physiology and Biochemistry M-I 5単位

生理学・生化学特別研究 II

Individual Research on Physiology and Biochemistry M-II 5単位

昆虫学特論

Advanced Applied Entomology 2単位

応用昆虫学の立場から植物保護を考えることを主眼とし、授業の内容を以下としたい。学生による分担発表の形式をとることを予定しているが、場合によっては相談により新刊洋書の訳出などとしてもよい。

1. 殺虫剤の作用機構と選択毒性、薬剤抵抗性
2. 寄主植物特異性研究から被害回避への応用
3. 昆虫の内分泌学、行動学からの応用
4. 情報化学物質とその利用
5. 物理化学的防除と遺伝的防除
6. 天敵および微生物の利用
7. 農生態系の特徴と総合的害虫管理の理論
8. バイオテクノロジーの応用 1：遺伝子改変昆虫・植物の利用
9. 同 2：昆虫による有用物質の生産

資料については、自分たちで調べることはもちろんであるが、いくつかについては教員側からも紹介する。

動物発生学特論

Advanced Animal Embryology 2単位

たった1個の細胞にすぎなかった受精卵が複

雑な構造と機能をもつ個体へと発生していく過程は、最も神秘的な生命現象の一つである。そこには、われわれヒトを含めたさまざまな動物に共通する「発生のプログラム」が存在する。本講義では、最近の研究で明らかにされつつある「発生のプログラム」の実体とその普遍性を理解することを目的とする。前半部（～第8回目）では、ヒトを含めた脊椎動物の個体発生の基礎知識を学ぶ。後半部では、無脊椎動物の個体発生にも共通した「発生のプログラム」の実体と普遍性を理解するとともに、ES細胞やiPS細胞などの幹細胞を利用した再生医療分野への応用も考える。

養蜂学特論

Advanced Apicultural Science 2単位

ミツバチとカイコは、ともに有史以前からの歴史をもつ2大有用昆虫である。しかし、養蚕ではカイコが“家畜”として、野生の昆虫とはまったく異なった形に変わってしまったのに対し、養蜂では、様々な人工的な飼養・管理法が工夫されてはきたが、ミツバチ自体は野生種とほとんど変わっていない。本講ではこの点を意識しつつ、ミツバチとその社会システムの原理や可塑性を理解したうえで、人間がそれにどこまで手を加え、利用できるようにしてきたかを分析するとともに、今後の可能性を考察する。主な観点は以下の通りとしたい。

1. 世界のミツバチと養蜂の現状
2. ミツバチ群の成り立ちと社会機構
3. ミツバチの学習能力と情報伝達システム
4. ミツバチの病害虫
5. 採餌と蜜・花粉源植物
6. 最大の貢献：ポリネーション
7. 養蜂技術：現状と未来技術
8. 養蜂生産物

昆虫行動生理学特論

Insect Behavioral Physiology 2単位

昆虫類は地球上のあらゆるハビタットに侵出し

ている。その種類の多さも抜群であり、全動物の70%を占めているとも言われている。ある意味で人類と肩を並べる昆虫類の繁栄を支えてきたものは環境に対する驚くべき適応性、言い換えれば“多様化”に他ならない。精巧につくられた小さなボディーには、進化の過程で獲得されてきた様々な驚くべき機能が濃縮されている。空気中に漂う数分子の化学物質をも検出する高感度の感覚器、刺激に対する俊敏な反応、成長の過程で示す劇的な変態など、その変幻自在とも思える柔軟性は他の生物の追随を許さないユニークなものである。

近年の機器分析の急速な進展ならびに化学的あるいは分子生物学的な手法の導入により昆虫類の示す様々な適応性行動の生理学的あるいは遺伝学的基盤にも科学のメスが入りつつある。本講では、それらの行動と情報化学物質（フェロモン、カイロモンなど）及びホルモンとの関連にスポットを当てたい。特に多数の個体からなる血縁集団を生活の基本単位とする社会性昆虫では、巣仲間、異性間、捕食者―被捕食者間などの情報伝達的手段としては言うに及ばず、齢間分業やカースト分化にも様々な化学物質が関係していることが最近になって次々と明らかにされている。それらの状況を踏まえ、原著論文の中から最新の話題を取り上げることを念頭におきたい。また、受講者自身によるテーマの提供と発表、それをめぐる議論という演習形式的な進め方も取り入れたい。

遺伝子発現制御特論

Advances in Gene Expression Control 2単位

近年のDNA塩基配列決定法の飛躍的な発達により、ゲノム情報を手に入れることは極めて容易となった。しかし、生物の設計図であるゲノムの配列情報からだけでは複雑な生命現象を理解することはできない。設計図から正しく製品がつくられなければ生命は維持されないからであり、その過程を探ることはポスト・ゲノム時代における生物学の主要な課題の1つである。設計図である遺伝子から製品であるタンパク質が作られる過程は、

さまざまな仕組みによって調節されている。本講義は遺伝子発現調節の全体像を理解することを目指し、多様な生命現象とその根底にある遺伝子発現調節のメカニズムとについて解説する。

社会生物学特論

Advanced Sociobiology 2単位

群体を形成するサンゴやクラゲ、群れをつくる魚やサル、さらにはアリやハチなどに代表される社会性昆虫など、様々な生物が示す社会行動の生物学的、遺伝学的基盤について理解する。さらに、利他行動、協約的行動、性、なわばり、など様々な現象の比較研究を通じて、ヒトを含めた生物社会進化の統一理論の構築を扱う社会生物学という学問分野で展開される諸問題について議論したい。

応用動物昆虫科学演習 I

Seminar in Applied Entomology and Zoology M-I 2単位

応用動物昆虫科学演習 II

Seminar in Applied Entomology and Zoology M-II 2単位

応用動物昆虫科学特別研究 I

Individual Research on Applied Entomology and Zoology M-I 5単位

応用動物昆虫科学特別研究 II

Individual Research on Applied Entomology and Zoology M-II 5単位

天然物化学特論

Advanced Natural Products Chemistry 2単位

天然物化学は生物が生産する、主に二次代謝産物を中心とした化学の分野である。二次代謝産物は構造、生理活性ともに多様で化学の立場から生物学的立場からも、また、農業、医薬、食品などへの応用面からも興味深いものが多く知られて

いる。学部の授業ではどちらかと言えば活性(フェロモン、抗生物質、忌避物質など)にもとづいた紹介が多かったかと思うが、本講義では複雑多岐なこれらの物質を構造と生合成の知見にもとづいて分類紹介するとともに、この分野の基盤技術となっている有機化合物の高度な構造解析技術の原理と実際を演習を行いながら身につけることを目指す。基礎的な化学、有機化学、できれば学部で行われる構造解析に関する授業の基礎的部分は理解してから講義に臨んでほしい。

応用微生物学特論

Advanced Applied Microbiology 2単位

微生物の産業利用は様々な分野で行われている。例えば、アルコール、有機酸、アミノ酸、核酸、酵素などが発酵プロセスによって生産されている。一方、我々が培養できる微生物は限られており、自然界に存在する数の0.01%以下にしか過ぎないということが明らかとなっている。これらの培養できない微生物は、“難培養性微生物”と呼ばれ、未開拓の遺伝子資源として注目されている。本講においては、このような“難培養性微生物”の利用に関する様々な試みについて考察する。

微生物生理学特論

Advanced Microbial Physiology 2単位

ポストゲノム時代の今日、微生物学の分野ではOMICS（生命情報科学）が脚光を浴び、産業利用につながることが期待されている。しかし実際に利用するには情報の大本、微生物そのものを扱い、それを識別できなければならない。また近年biodiversity（生物多様性）という言葉が盛んに使われ、本年は名古屋で生物多様性条約に関する国連の締約国会議が開催される。この条約は生物の多様性を保全し、持続的に利用し、得られた利益を衡平に配分しようという理念に基づいている。多様性を知るには分類と同定が不可欠である。そこで本講では、応用を目的とした菌類の分類学、

新規生理活性物質の探索技術、今後の二次代謝産物の研究意義などを考察する。

微生物学特論

Microbiology 2単位

微生物という言葉はごく一般的に用いられており、普段の生活の中でもさまざまな形で私たちは、直接・間接的に関わっている。また、専門的な学術的研究を行う上で、研究対象であるのみならず、研究材料としてもかなり広範に取り上げられている。

しかしながら、生物学という学問分野では、微生物という言葉は登場しても、生物群としての取り扱いは見られないのが現状である。農学研究科として、多くの教員や大学院生が微生物に関わる研究に取り組んでいることから、微生物という生物群について、あらためて、細胞科学（細胞の構造、物質代謝、エネルギー代謝、遺伝情報）という視点で学ぶことができる授業（講義形式）にしたいと考えている。

微生物科学演習 I

Seminar in Microbiology M-I 2単位

微生物科学演習 II

Seminar in Microbiology M-II 2単位

微生物科学特別研究 I

Individual Research on Microbiology M-I 5単位

微生物科学特別研究 II

Individual Research on Microbiology M-II 5単位

食品化学特論

Advanced Food Chemistry

2単位

食品の化学的性質についてはすでに学部における授業で学んでいる。そこで本特論においては、近年海外で作付けが状態化しているバイオテクノロジーを用いた農産物生産に焦点をあて、食品全般の化学的特徴を知るてがかりとしたい。

バイオテクノロジーを用いた農産物生産はこれまで、育種メーカー、農薬メーカー、栽培農家におけるメリットが強調されており、最終的な消費者にとっての利益が十分説明されてこなかった。このため、日本ではこのような作物生産に対する拒否反応が大きい。この部分については、ビデオ資料を使って議論をしていきたい。

また本特論では、FAO/WHOの議論をとりまとめたCodexの資料を輪読しながら、私たちが摂取してきた食品そのものの性質を改めて認識し、バイオテクノロジーによる農産物生産を正しく理解することも目的とする。漠然と感じているバイオテクノロジーに関する不安を払拭するために導入された「実質的同等性」という概念が重要であり、食品に関する安全・安心を確保するための知識を深める。

食品製造学特論

Advanced Food Technology

2単位

食物の素材は生物そのものであり生物生産物であって、複雑な成分と機能をもつ。それらをさらにヒトにとって好ましい食物として毎日食べ続けるためには、多様な加工、保存、調理を必要とし、その過程でおこる変化は複雑である。ときには好ましい風味の形成とはならず、生体への影響を懸念する問題も生ずる。そこで、食品製造においては、素材の生物的、化学的特性を十分に理解し、各過程における成分の相互作用を明らかにする必要がある。

食品の主成分を取り上げ、それらの化学的性状、加工、貯蔵における変化、さらに食品の品質に関

わる問題に着目して講述する。

食品栄養学特論

Advanced Food Nutrition

2単位

食品成分と疾病の関係の中で、特に近年増加しているアレルギー性疾患は重要な研究課題である。本特論では免疫アレルギー系の基礎的な知識から、免疫細胞における複雑な情報伝達機構に関する知見の概要を身につけることを目的とする。

まず、液性免疫、細胞性免疫の基礎を復習し、抗体遺伝子の再構成、B細胞の分化と様々な分子の発現、T細胞における抗原認識、樹状細胞の抗原呈示などの概念を身につける。また、免疫学的実験手法についても概要を学ぶ。免疫応答に関する情報伝達分子には多種多様なものがあり、その発現とシグナルの関係は複雑なネットワークを作っていることを理解する。

食糧経済学特論

Advanced Lecture in Food Economics

2単位

日本における食料関連マーケットの規模は約98兆円にも達するなど巨大マーケットを形成しているが、80%以上は食品工業ならびに外食産業で占められている。

本講義では、食品産業レベル、個別企業レベルの特性を理解するとともに、それらを構成している経営機能についてその特徴を論ずる。

- (1) 食品産業の特性
- (2) 食品企業の特徴
- (3) マーケティング
- (4) 財務管理

食品安全基本論

Safety of Food

2単位

食品の安全を考えるためには、食品行政における国内・国外の安全性確保のための体制構築、法の施行にあたっての細かい規則、すなわち食品に

においてはそれぞれの規格・基準の制定、行政との関係が必要である。一方、食料の生産、流通、消費等の過程において安全性、健全性は時代の流れや社会的背景によっても左右される。本講では、微生物性、ウイルス性、自然毒、化学性食中毒などの本質を理解するとともに、有害物質による食品汚染、食品添加物、遺伝子組み換え食品さらに自主衛生管理などの重要な事項を取り上げる。

食糧科学演習 I

Seminar in Food Science M-I 2単位

食糧科学演習 II

Seminar in Food Science M-II 2単位

食糧科学特別研究 I

Individual Research on Food Science M-I 5単位

食糧科学特別研究 II

Individual Research on Food Science M-II 5単位

行動生態学特論

Advanced Behavioral Ecology 2単位

生物は環境との相互作用の中で、様々な反応を示す。動物では、環境への反応が多くの場合行動に表れる。この講義では、特定の生態的な条件のもとで動物がどのように行動するか、またそのような動物の行動がなぜ進化してきたのかを考える。気候など非生物的環境や、捕食者・競争種・餌生物などの生物環境との相互作用について理解を深め、環境の変化がどのように動物の行動に影響を及ぼすかを考察する。また、動物個体群や生物群集の保全策についても考えていきたい。

生態系生態学特論

Ecosystem Ecology 2単位

生態系生態学は、生物群集と環境要因からなる生態系についての総合的な学問分野である。生物群集には、さまざまな種類の生物集団が含まれ、その働きから、生産者（植物）、消費者（動物）、分解者（菌類、細菌類）に分けて考えられる。環境要因には、物理・化学的な（光、温度、水、栄養塩などの非生物的）要因と生物的要因があり、「環境⇄生物」、「生物⇄生物」のように、互いに複雑な影響をもち、それらは刻々と変化もする。生態系生態学では、このように複雑な系である生態系を理解するために、様々な角度からその構造と機能にアプローチする。近年では、地球温暖化に関わる二酸化炭素について、生態系における出入り（呼吸による放出と光合成による吸収）と貯蔵のような「生態系の働き」が、世界的に注目を集めている。本講義では、炭素と窒素を中心に生態系の物質循環を理解し、さらにエネルギーの流れにも着目して、講義を行う。また、授業の一部で原著論文の輪読を行い、生態系研究に関する最新の考え方、測定技術や知見にも触れる。

環境動態保全学特論

Environmental Dynamics and Conservation Ecology 2単位

今日、地球環境悪化に関する報道がなされない日は皆無となり、一昔前までの“地球環境は研究者レベルの問題”というような認識から飛躍し、一般の人々の大きな関心事の一つとなっている。本講義では、地球全体を人間活動をも含めた一つの生態系と考え、進行しつつある森林の減少、気象変動、大気・海洋汚染等の危機的な状況が生態系に及ぼす影響を学際的な広い視野で検討していく。また、環境の悪化により引き起こされる生物多様性の減少について、その考え方や重要性を概説し、保全を検討するための基礎的知識および方法論を解説する。とくに、多様性の構造やそれがもつ機能について、生態学の基礎知識を駆使して議論する。

土壌圏保全学特論

Pedosphere Conservation 2単位

地球は、他の天体には存在しない土壌環境がある。本講義では、まず地球の土壌圏の成立から始め、その利用目的が我々の生命を維持する食糧生産の場であることを学ぶ。そして土壌圏は持続的な食糧生産を可能にし、循環させる場ともなっていることを認識した上で、土壌圏の保全について、特に環境破壊や天災等で劣化した土壌の修復と、流亡や浸食等で失った土壌圏の再生について講述する。

環境微生物学特論

Environmental Microbiology 2単位

土壌、海洋、雪氷等、多様な環境中での微生物をとりあげ、生態系における役割や、利用法等について考察する。また、最新のトピックス等から、近年の研究動向についても紹介。

生態系科学演習Ⅰ

Seminar in Ecosystem Science M-I 2単位

生態系科学演習Ⅱ

Seminar in Ecosystem Science M-II 2単位

生態系科学特別研究Ⅰ

Individual Research on Ecosystem Science M-I 5単位

生態系科学特別研究Ⅱ

Individual Research on Ecosystem Science M-II 5単位

科学英語表現

Postgraduate Scientific Writing Course 2単位

科学論文の基本的な文章構成を理解し、緒言・方法・結果・考察それぞれのセクションに含まれるべき要素を学ぶ。毎回関連分野の英語論文や配布資料を使って講義を行ったあと演習を行う。大学院での研究論文をまとめる上で助けになるように、それぞれのセクションを書きながら進め、最終的に予測結果を含めた論文を完成させることを目標とする。

教育内容・方法学研究

Study of curriculum and instruction 2単位

近年教育改革が大きく進み、学校の変革も目ざましい状況にある。ここでの重要な視点の一つとしてあげられるのが教育内容・方法の分野である。

本講義においては、教育内容・方法学研究の意義と方法をもとに、学力編、教育課程理論と実際、教育方法学特に学習指導論の理論と実際について探究するものとする。このことを踏まえて、教師の力量形成との関連についても考察、吟味したい。

教育制度学研究

Educational system 2単位

今日の教育制度を理解するために重要な論点を中心に講義すると同時にワークショップによってさらに深い理解をめざすこととする。教育制度を根拠づける教育法律と制度の運用である教育行政との関係、つまり教育の【制度・法・行政】の総合的な把握が可能となれば、将来のリーダー的な教員として十分な専門知識を備えたこととなる。本講義がめざす姿である。内容として、初等中等教育制度とこの根拠となる学校教育法制の理解を深めつつ、具体的な事例として、幼稚園から高等学校における教育課程とこの担い手である教員の在り方に焦点をあて、政策・法・行政の関連をワークショップの課題とする。次に教育委員会制度を

概観し、これまでの論点を検討した上で、現在大きな議論となっている同制度の改革課題について、これからの日本の教育の在り方・課題の実現の方法である教育振興基本計画・地方自治体の教育計画と関連づけた検討を通じて深めてみたい。

教育実践学研究

Study of education practice

2単位

近年における教育課題の複雑化・高度化に応じて、教師の実践的指導力とくに授業力が求められている。こうした実践力を育むためには、教育実

践に関連した教職の基本的性格、教育実践の歴史、理論・方法を理解し、それらと基礎とした上で自らの実践のあり方を模索していく必要がある。

この授業は、教育実践に伴う教師の日常世界、教育実践の歴史的変遷、理論的背景・方法論を理解・習得し、主体的に具体的な問題への解決策を探究することにより、多様な教育課題に対応できる能力の基礎を育むことを目指すものである。授業では講義をはじめ、参加者の研究報告、グループワーク、ディスカッション、現場教員によるワークショップなど、テーマに応じて多様な形式を取り入れるものとする。